

テイヤール・ド・シャルダン研究史素描

村田 奈生

はじめに

本稿では、フランスのイエズス会士ピエール・テイヤール・ド・シャルダン（1881-1955）の思想が、カトリック教会内および、それを超えて学術の諸分野においてどのように評価されてきたのかを概観する。

テイヤール・ド・シャルダンは北京原人の発掘に携わった地質学者・古生物学者であり、キリスト教と進化論の融合を図ったことで知られる。1881年、フランスのクレルモン＝フェラン近郊サルスナで、ブレーズ・パスカルの血を引く父とヴォルテールの血を引く母の元に生まれたテイヤールは、1899年にイエズス会に入会し、1911年に叙階される。1922年には、論文「フランスの始新世後期哺乳類とその生息地について」が認められ、パリ・カトリック学院で教授職を得る。しかし、進化論を承認していなかったローマ教皇庁によって彼の思想は危険視され、キリスト教に関わる著作の刊行を禁じられる。フランスを離れて中国での発掘活動に専念することになったのちは科学論文のみを世に送り、キリスト教と進化論を融合した独自のヴィジョンについての記述はすべて蔵していた。ただし、文通相手がいたことや、それまでに出回っていた記述が秘密裏に印刷され読まれていたこと、コレージュ・ド・フランスにて彼の思想が紹介されていたことから、その思想を知る者は水面下には存在していた。

晩年もフランスに戻ることは許されず、1955年、ニューヨークにて復活祭の日に世を去る。死後も教皇庁によるタブー視は続いてきたが、新聞や雑誌が彼の思想を紹介したことで支持者が可視化・増加し、同年10月には著作集の刊行が始まる。その第一巻『現象としての人間 (*Le Phénomène humain*)』⁽¹⁾の発刊を機に「テイヤール現象」と呼ばれるブームがおこり、膨大な量の論文が世に出るとともに、テイヤール協会や討論グループが誕生した⁽²⁾。

テイヤールと親交が深く、その思想に通じていたイエズス会士アンリ・ド・リュバックが、1962年4月にテイヤールを紹介する著作を刊行する。それを牽制するような形で同年6月に検邪聖省から「警告 (*monitum*)」が發布され、テイヤールの著作を図書館の目立たないところに置くよう指示される。しかし、10月に第二ヴァチカン公会議においてヨハネ23世がテイヤールの思想を肯定的に取り上げる。その後も保守派による糾弾や「警告」の再発行といった事態を挟みながらも、歴代教皇ら⁽³⁾によって肯定的に評価されている。近年では教皇フランシスコによる回勅『ラウダート・シ』の注釈にて言及された⁽⁴⁾ほか、2018年5月のロイヤル・ウェディングでのスピーチにおいてその名が挙げられた⁽⁵⁾。

テイヤールの思想は、一般に理解されているところでは、進化論を主軸にしたものである。科学（進化論）とキリスト教信仰の矛盾なき昇華を企図したその思想の概要は、次のようなものである⁽⁶⁾。

テイヤールは、宇宙の歴史を物質圏、生命圏、精神圏に区切る。二つ目の圏である生命圏におい

て、生物は漸次的に複雑化し、その果てに高度な知性と意志を持つ存在である人間が誕生した。生命圏での複雑化の極みにおいて人間は新たな段階である精神圏に突入し、現在もその中にいる。テイヤールによると、人間は精神圏においては未熟であるが、絶えざる発展によって、精神圏の次の段階、すなわち進化の究極点である「オメガ点」へ至りうる存在である。万物はこのオメガ点において宇宙的キリストと一致することで完成・救済される（宇宙が法悦する）。テイヤールは、このようにキリスト教によって基礎づけられた進化思想を提示し、進化論によってキリスト教が骨抜きにされたという同時代人々の考え（より一般化して言えば、科学の発展によって世界は説明し尽くされ、宗教は力を失うというであろうという考え）を退ける。進化を本質的に有神的なものであると考えるテイヤールは、〈進化＝前方向を志向するもの〉と〈キリスト教＝上方向を志向するもの〉の行く先は、未来において一致すると確信していた。

テイヤールの思想はその死後まもない 1960 年代を中心に、近代科学のパラダイムが批判されていく学界の潮流にも乗り、文理をまたがる分野から注目を浴びた。そのため、先行研究も「宗教と科学」の枠でテイヤールを捉えたものが多い。しかしながら、かつてのテイヤール思想をめぐる論争を見る限り、そのような評価軸のみからテイヤールを位置づける試みは平板な結論に至る恐れがある。

そこで本稿では、最初の 3 つの章で「宗教と科学」の観点からテイヤールを扱った先行研究を整理し、そして最後に異なる要素に着目してテイヤールを再解釈する可能性を探る。すなわち、1 章では教会内部からの支持および批判、2 章は神学以外の分野からの評価、3 章では日本での動向についてそれぞれ概観し、最終章にて、彼の思想が詩として結晶した一篇「永遠に女性的なるもの——ベアトリックスに—— (L'Éternel féminin a Béatrix)」を中心とした研究に着目する。

1 章 テイヤール思想の評価 教会内部より

テイヤールは「科学者と呼ぶべきか、それとも預言者と呼ぶべきか、それとも大詩人と呼ぶべきか」⁽⁷⁾、「宇宙神秘家」⁽⁸⁾といった絢爛な肩書を施され多面的な魅力を持つ人物として語られる一方で、批判者からは「SF 神学」⁽⁹⁾、「神の国に入りこんだトロイの木馬」⁽¹⁰⁾とまで揶揄されてきた。テイヤールは自身を哲学者でも神学者でもないと言ひ、あくまで科学者を自称する。その姿勢は、著作『現象としての人間』冒頭の「本書が正しく理解されるには、形而上学的な著作や神学的試論の類としてではなく、もっぱら科学的研究論文として読んでもらわなければならない」⁽¹¹⁾という記述にも見出される。しかし、のちに述べるように、テイヤールの思想は科学を逸脱したものと捉えられている。

神に至る道のりについての語りから自らの科学的知識を応用したテイヤールの思想の新奇さは、熱狂的な支持と徹底的な告発という二極の評価を呼んだ。

ここからは、テイヤールに対するキリスト教内部からの評価を、肯定的なものと否定的なものに分けて見てゆく⁽¹²⁾。

1-1 支持

「宗教と科学の調和」という大テーマを設定したテイヤールは、同様の問題意識を持つアリストー・マクグラスのような神学者によって言及される。リチャード・ドーキンスに代表される科学的

無神論に対する論客として知られるマクグラスは、当時は相対立すると目された進化論とキリスト教信仰という二つの事柄の融合を図ったという点で、ティヤールをプロセス神学の系譜に置きながら、その先進性・先見的な学際性を高く評価する⁽¹³⁾。

多くのティヤール支持者がカトリック教会内外にいるが、第一に挙げるべきは第二ヴァチカン公会議で神学顧問を務めたアンリ・ド・リュバックであろう。

冒頭で述べたように、危険思想の持主として警戒されていたティヤールであるが、そのような判断は当時の教会内の総意であったわけではない。ティヤールの死後にその著作や関連書籍の刊行を促したのは他でもないイエズス会士たちであり、また日本管区長であったペトロ・アルペがイエズス会の新総長として記者会見を行った際には、ティヤールの現代性を讃えている。ティヤールの正統性を強調する論文の中には、当時の教皇庁の保守的な態度を非難するものも少なくなく、その際にティヤール思想と並置して言及されるのは第二ヴァチカン公会議の成果である。この公会議の神学顧問であったリュバックは、ティヤールと30年余り文通を続け、その思想に通じていた。イエズス会総長ヨハネス・バプティスタ・ヤンセンスを通じて管区長からティヤールについての著作を書くよう依頼されたリュバックは、数か月後に自著『ピエール・ティヤール・ド・シャルダンの宗教思想 (*La pensée religieuse du père Pierre Teilhard de Chardin*)』⁽¹⁴⁾を書き上げ、その中でティヤールの既刊の著作を多分に引用して註解を行いながら、それまでに世に出たティヤールに関する膨大な論文を検討している。教皇庁ではこれをも規制しようとする動きがあったが、時の教皇ヨハネ23世は反対した。その後の著作にもティヤールの正統性を強調しようとする意図が明確に表れており、特に1968年の論文「ティヤールと現代 (*Teilhard et notre temps*)」⁽¹⁵⁾においては、ティヤールがいかに神の人格というものを重んじていたかが仔細に述べられている。リュバックは、ティヤールの「科学は新しい神を発見しようとしているのではなく、単に神への踏み台である物質の実態を明らかにしようとしているにすぎない。人は旅によってではなく、法悦によってのみ絶対者に近づくことができる」⁽¹⁶⁾という言葉を引きながら、「ティヤール・ド・シャルダンは形而上学者としての使命をもつ人ではなく、また本職の神学者でもなく、神秘家 (*un mystique*) であった。しかし、このことが論争の種になった」⁽¹⁷⁾と語る。

このように、ティヤールを評価する際に「神秘家」という名称を用いる傾向が研究者の間に見られる。神秘家、あるいは神秘主義という概念は慎重な定義を要するものであるため、ここでは彼がそれに即すか否かということには立ち入らないが、若干のことに言及する⁽¹⁸⁾。ティヤール研究者がティヤールについて語るにあたり、かくのごとき肩書を採用する際、それは彼が進化の先にあるべき一なるものへの統合を希求したこと、ならびに自身の信仰を起点として積極的に世界に寄与しようと努めたことが所以となっている。ただし、それは科学にも神学にも分類しがたい彼の思想の扱いの困難さに由来するものでもあり、一部の論者によっては科学的批判および神学的批判を退けるための便利な術語として用いられていることは否めない⁽¹⁹⁾。

ティヤール自身も、神秘主義 (*la mystique*) について少なからず言明を残している。彼は神秘思想を東洋のものと西洋のものに二分し、後者を高く掲げる。そして、東洋の神秘思想を〈多なるものを幻として否定し尽くすことで完全な無へ至ろうとする思想〉と捉え、そのような態度は厭世的であると断じた。そして、キリスト教の神秘思想を〈多なるものを一つに収斂し、個を個として尊重しながら一なる神のもとに統合することを目指すもの〉とし、これこそが人間を未来へと導い

てゆくと言ふ。しかし同時に、あまりにも単なる倫理に振り切れた今日のキリスト教には東洋的要素が必要であるとも付言し、その先にこそ真のキリスト教が現れると述べる⁽²⁰⁾。仏教研究者でもあったリュバックはこのようなテイヤールの東洋思想理解に疑義を呈すが、テイヤールは批判を受け止めつつも、自身の立場を撤回しない。彼はあくまで彼なりの東西の神秘主義の比較を通して、厭世ではない、この世に即した形での宗教的実践を重んじる立場を明確にする⁽²¹⁾。

テイヤールの思想が耳目を集めたのは一時のことではない。1981年にテイヤール生誕100周年記念式典がパリ・カトリック学院とパリ・ノートルダム大聖堂、セーヴルのイエズス会センター、また当時の大統領ミッテランの後援によりユネスコで開催された。テイヤール死後50周年の折にも、2001年から5年間、世界の主要都市二か所で毎年テイヤールに関するシンポジウムを行う「テイヤール2005計画」⁽²²⁾が企画・実施され、スイスのイエズス会発行の文化雑誌『ショワジュール (*choisir*)』では2005年4月にテイヤール特集が組まれた。死後の沸騰の人氣が沈静したのちも衰えぬ支持があることが窺える⁽²³⁾。

1-2 批判

テイヤールは進化論とキリスト教信仰の間にあるとされる対立を解消しようとし、出版規制という不遇の中でもキリスト教への貢献を志していたのではあるが、彼の神学的な語りには教義に反するようないくつかの不備があると指摘されてきた。テイヤール思想の異端性の検討は本稿で意図するところではないが、本節ではその点をつまびらかにした神学者らによるテイヤール批判に触れておく。

ピオ12世によって20世紀の教会博士と評されたディートリッヒ・フォン・ヒルデブラントは、テイヤールの思想を「神学的フィクション」と突き放しつつ、テイヤールと同時代を生きた哲学者エティエンヌ・ジルソンが、その啓示解釈を「グノーシス的」と語ったことを援用して、テイヤールのキリスト論を徹底的に非難する。オメガ点と同一視されたキリストはもはや人格的個人ではなく、その十字架上の死と贖いの意味はテイヤールによって無に帰されているというのがヒルデブラントの主張である。テイヤールは福音書のイエスと、パウロが語った「アルファでありオメガ」である宇宙的イエスを重ね、その人格の無二性を強調しすぎるほどしているのであるが、ヒルデブラントによってテイヤールの思想は「現代の典型的な知的倒錯の多くを体現している」ものと扱われている⁽²⁴⁾。アメリカの保守派神学者ポール・A・ウィッケンズは、テイヤールがアダムとイヴの存在を否定して新しい宗教を作ろうとしていると告発する。その際に並べて非難されるのは「無名のキリスト者」の概念で知られるカール・ラーナーである⁽²⁵⁾。テイヤール批判は第二ヴァチカン公会議以降のカトリックの近代化に対する保守派の反動とも無関係ではない。

他にも彼がイエス・キリストの強調に終始して父なる神や聖霊についての記述を欠いている点や、罪や悪の問題を避けている点、汎神論的な表現が散見される点などが議論の対象になる。また、糾弾の言葉として頻繁に用いられるのは「楽観主義」という言葉である。オメガ点における約束された万物救済のヴィジョンは、あまりにも都合が良すぎるとして神学者を含む多方面からしばしば告発される⁽²⁶⁾。ただしリュバックはテイヤールが直線的で自動的な進化を思い描いていたわけではないと指摘し、そして彼が人間のオメガ点への旅路を「十字架の道行きに匹敵する」⁽²⁷⁾と語っていることから、決して一口に楽観的とは言えないと反論する。

このように、時に神秘主義者という肩書を付してテイヤールを聖者のように称える人々と、異端者として憎む人々と、立場は分裂している。しかしながら、テイヤールが教義や『創世記』の記述に抵触するようなことを語っていると主張する批判者と、テイヤールはそもそも神学者ではないため多少は大目に見るべきだとして、逆境の中でも科学とキリスト教を統合・昇華して世界に寄与せんとしたその姿勢を評価する支持者とでは、同一平面上での議論が成立しにくいのも確かである。

科学的正当性や神学的正統性を脇に置きつつその架橋的な視座を評価する傾向はテイヤール支持者にあまねく見られるのであるが、これはテイヤールを評価する際の凝固した常套手段でもあり、それ以上の議論を撥ね退けてしまうものでもある。しかし敢えてまとめるならば、その処遇が教会内部の総意であったかは措くとして、進化論という「危険思想」への大胆な歩み寄りの姿勢が保守層に警戒され、その活動を制限されながらも自身の思索および考古学調査に邁進し、死後は論争を巻き起こしつつも一定の評価を得たイエズス会士とみるのが妥当であろう。

2章 テイヤール思想の評価 教会外部より

2-1 科学者からの評価

1章冒頭で引用した、『現象としての人間』の「本書が正しく理解されるには、形而上学的な著作や神学的試論の類としてではなく、もっぱら科学的研究論文として読んでもらわなければならない」という言葉からも窺えるように、テイヤールはあくまで科学者としての立場を崩さなかった。それゆえ当然のこととして、彼の思想は科学者たちからの評価に晒される。

海洋生物学者アリストアー・ハーディは、テイヤールの思想の根本の非科学性や誤解を指摘しながらも、科学と宗教を橋渡しせんとする姿勢を高く評価する。テイヤールと親交が深く、『現象としての人間』の英語版の緒言を担った進化生物学者ジュリアン・ハクスリーも同様の評価軸を持っており、彼が初代事務総長を務めたユネスコはテイヤールに関するシンポジウムを何度も開催している⁽²⁸⁾。生物学者アドルフ・ポルトマンは、テイヤールの進化の展望そのものについては言明を控えながらも、その生物学的学説が自身の見解と響きあうものであることを認める⁽²⁹⁾。

以上のようにテイヤールの努力を歓迎する評価も見られるが、テイヤールが科学の中心に自身の信仰を据えたことで生じた、決して科学的思考に徹したとは言えない説を、さも科学的裏付けがあるかのようにして提出していると非難する科学者も少なくない。具体的には、テイヤールが「精神エネルギー」といったものを自身の進化説の中で用いていることや、遺伝するはずのない獲得形質が子孫へ伝播してゆくと前提していること、進化が多方向ではなく一方向に収斂するという仮説を自明視していることなどが問題点として挙げられる。ピーター・メダワーは著作の中で『現象としての人間』批判に一節を割き、テイヤールの進化思想が遺伝学の誤解の上に成り立っているために科学的に支持されないと主張するのであるが、彼はそれ以上にテイヤールの文体や宗教性に拒否感を示す。テイヤールが用いる絢爛な形容詞を論って「過剰」と一蹴し、「形而上学的な奇想」と総括するメダワーは、科学的な神秘主義者たちが宇宙と共鳴しがちであり、著作を読む限りテイヤールもその例に漏れないと皮肉交じりに非難している⁽³⁰⁾。ドーキンスは、自身がかつて『現象としての人間』を耽読したことに触れながらも、メダワーによる非難に賛同しながらテイヤールの思想を「偽りの詩を身にまとった科学の典型」と酷評する⁽³¹⁾。

ここでも1章で述べた神学者からの支持と批判と同様の構図が見られる。ハクスリーらはテイヤ

ールの方法論の手落ちに譲歩して、その学際的な志を評価する。反対にメダワーらは、あくまでテイヤールの科学的誤謬を抉り出し、志などは意に介さず徹底的に批判するのである。どちらにしてもテイヤールの前提に彼自身の主観が混ざっており、客観性を旨とする科学的考察としては十全なものではないことは両者の合意するところであろう。

しかしながら、自然科学が要する客観的な視点というものが、実際どれだけ実現可能であるのかという間もここで生じる⁽³²⁾。テイヤール自身も『現象としての人間』の中で、科学的記述について「たとえどんなに客観的に見えたとしても、科学者がこれを公式化しようとするや否や、どうしても仮説の体系に包まれてしまう」⁽³³⁾、「主観的な見地からいって、われわれはわれわれ自身に対してどうしてもパースペクティブの中心たらざるをえない」⁽³⁴⁾と主観と客観の問題に触れ、いくばくかの批判については甘受しつつも退けようとする素振りを見せている。

2-2 宗教学者からの評価

ここまで、テイヤールに対する神学者と科学者の評価を見てきた。本節では、二人の宗教学者による言及に目を向ける。

第一に挙げるのは、現在ブリストル大学で教鞭をとっている宗教学者アーシュラー・キングである⁽³⁵⁾。彼女はテイヤールを神秘主義者として語り出そうという明確な意思をもっており、テイヤールの思想ならびにその東西の神秘思想理解について、彼の読書歴⁽³⁶⁾や交友関係⁽³⁷⁾と照応しながら研究を行っている。そして、宗教間対話やポストモダン世界の中でのキリスト教の在り方、環境問題、信仰と科学の調和といった現代の神学議論がテイヤールの中に先取られているとし、また、活動を制限されながらも自身の専門分野と信仰を統合することで世界への貢献を志したテイヤールの生涯を「活動的な神秘主義 (Mysticism of Action)」と評価して強く支持する。テイヤールが神秘主義を東西で二分したことについては積極的に肯定しないが、特定の神秘主義を拒んでいたわけではないと擁護している。そしてテイヤールが用いる「汎神論 (pantheism)」という語を「汎在神論 (panentheism)」と言い換えながら、彼が万物に神を見、神に万物を見た点にイグナティウス・ロヨラに比しうる霊性を見出す。地球との繋がり (= 科学) と、神との繋がり (= 信仰) を昇華した第三の道を求め、そしてそれが進化の過程と同一の軌道に乗せられる点が、テイヤールの思想が「新しい神秘主義」たる所以であるとキングは語る。

キングは、科学と神秘主義と詩を混淆した思想は科学からも神学からも厭われがちであると述べ、「オメガ点」といったテイヤールの用語の新奇性や、その思想が当初は公にはなく小グループの中でのみ扱われていたことが、現在に至るまで特定の人々にとって受け入れがたく感じられている原因であると推察する。

キングが指摘するようにテイヤールの思想は一部の支持者の中で醸成され、独自の発展を遂げた⁽³⁸⁾。オメガ点という遠い未来に結実する万物救済のヴィジョンは、一なる神への統合を目指しているという点から神秘思想の文脈で語られるとともに、ニューエイジ思想の興隆とも不離であるような人気を博してきた。

ミルチャ・エリアーデは、パリにおける雑誌『プラネート (*planète*)』の流行と、テイヤールの人気に同質の匂いを嗅ぎ取る⁽³⁹⁾。エリアーデはこの雑誌を「科学をエソテリスム秘教と抱き合わせ、人間が再び有意義なものとなり永遠の完成が約束される、新鮮で魅力溢れる神秘の宇宙を提供した」もの

であると評し、続けて「それは救済の科学を喧伝した。すなわち科学的情報でありながら、同時に救世論的であった。人はもはや、偶然に何の目的もなく生み落とされた不条理な世界における、疎外された無用な存在とならずにすんだのである」⁽⁴⁰⁾と述べる。そして、テイヤールの功績をそれに重ね合わせる。エリアーデは、科学とキリスト教信仰の橋渡しの試みそのもの以上に、テイヤールが、生命は進化の果てに滅ぶのではなく神へ至るといふ説を掲げて当時の悲観主義・ニヒリズムに抗う楽観的な展望を提供したことに意義を見出す。すなわち、前述の楽観主義という語はエリアーデにあって肯定的に用いられるのである。そしてエリアーデは「彼は信頼に足る多くの読者を獲得した唯一のローマカトリックの思想家であった」⁽⁴¹⁾、「テイヤールは不可知論的の科学者や、また一般の宗教的文盲者に対して、分かりやすく意味のある言葉で自らの信仰を表明した最初のキリスト教著作家であった」⁽⁴²⁾と高く評価する。しかし、あくまでもその宇宙観を「歴史の産物」、「薔薇色の世界に浸りたいというノスタルジアの表れ」⁽⁴³⁾と、文化の中の一流行として客観視する。

エリアーデの見立てに則ると、テイヤールの主張は、キリスト教は科学によって乗り越えられるべき時代遅れの産物なのではなく、むしろ科学の先にあり、科学を牽引するということである。テイヤールの意図は、科学的世界観の伸長によって終末の救いが現実味を帯びなくなった悲観の時代に、光芒となる思想を提示することにあった。

3章 日本における受容

本章では日本国内のテイヤール受容を概観する。

テイヤールの没後、依然としてその思想について公に語ることは禁じられていたが、その通達には日本には届いていなかった。逝去を知った直後に淳心会の司祭 W・A・グロータースが上智大学の雑誌『ソフィア』に掲載した「テイヤール・ド・シャルダン追悼」⁽⁴⁴⁾が、おそらく公的に発表されたテイヤールについての文書の中で最初期のものであろう。ここでは、人間が進化の果てにひとつに収斂し、神と一致するというテイヤールの進化思想が簡潔に紹介されている。

その後、日本では1965年に雑誌『思想』⁽⁴⁵⁾にテイヤールについての論文が二本掲載されたほか、1969年に雑誌『理想』⁽⁴⁶⁾でテイヤール特集号が組まれた。以下に内容を記載する。

倫理学者・三雲夏生は、「現代とテイヤール・ド・シャルダン」⁽⁴⁷⁾において、宗教的世界観にとって代わる形で科学的世界観が伸長し、救済を信じることができなくなった同時代人に、再び生の意義を提示する、というテイヤールの危急の動機に焦点を当てる。三雲は、人間の進歩とキリスト教的救済が軌を一にするものであると主張するにあたってテイヤールが「実証的」な手続きを踏んだことに着目し、それこそがテイヤールの魅力であり、同時に批判の源であると述べる。論全体においては、単なる道徳でもなければ個々人の内面の問題でもなく、宇宙の歴史そのものであるキリスト教の姿を掲げるテイヤールの思想が、教会共同体の賛美の形をとりながら包括的な救済論へと至ってゆく流れが描き出される。

中世哲学会の草創期のメンバーである江藤太郎は、「テイヤール・ド・シャルダンの哲学思想について」⁽⁴⁸⁾の中で、テイヤールが「現象(学)」という言葉をどのようなつもりで用いているのかを、ヘーゲルやフッサール、バルクソンの思想と照合しながら考察している。しかし江藤が意図しているのは、哲学者との相互参照によって暗々裏にテイヤールに哲学者の称号を付すことではなく、あらゆる思想・学問を養分にしながら無二の思想を構築したテイヤールの独自性の提示である。

進化論に関する多くの評論を残した生物学者・八杉龍一は、テイヤールの宗教的立場については自分の考慮の埒外と一線を引き⁽⁴⁹⁾、「テイヤールと進化」⁽⁵⁰⁾にて科学面に焦点化した論を展開する。八杉は 20 世紀の生物学者のうちに総合的な学説への志向があったことを指摘し、その中で際立っていた存在としてテイヤールを位置づける。科学者からの批判については、人間が語る以上は人間中心の記述を免れえないと考えたテイヤールを、人間中心主義を脱したというふれこみの近代科学の方法論で批判すること自体が不道理であるとして退ける。

『思想』に掲載された八杉の論文「人間の偉大さと「見ること」——私のテイヤール・ノート——」⁽⁵¹⁾を併読すると八杉の主張が見えてくる。実存的な問いに対して宗教や形而上学ではなく科学から接近してゆくための方法を模索していた八杉にとって、テイヤールは有力な範例だった。八杉は、テイヤールが科学を実感のともなわない数字を扱う抽象的な概念操作の場に留めずに人間の営みと接続させた点、すなわち科学と人間・自然を分離させず統一的に「見る」ことを徹底した点をテイヤールの功績とする。しかし、八杉はここではあくまでテイヤールの科学面での不備を詳らかにしてその運用不可能性を示し、科学と人間を同次元に捉えようとしたその姿勢をただ評価するに留めている。

イエズス会士ペトロ・ネメシエギは、「シャルダンの神学」⁽⁵²⁾において、オメガ点や宇宙的キリストといった独自の用語を噛み砕いて解説しながらテイヤールの生涯にも触れ、彼が優れた神学教育を受けていないながらも自身の中で深い神体験を醸成させていたと記している。聖霊や罪の問題に触れていないといった神学的な欠如があることを認めつつも、テイヤールが全宇宙をキリストの神秘体として建設するための要に教会を据えていたことを強調し、テイヤール思想が全体としてみれば極めて正統的であることを強く示している。

自身も学問の総合への志向を持つ科学者・詩人の島崎通夫は、「J・S・ハックスレーとテイヤール・ド・シャルダン」⁽⁵³⁾において、ハクスレーとテイヤールの綿密な比較思想研究を試みる。ヒューマニスティックな進化思想を掲げていたハクスレーが、テイヤールの思想に多大な関心を寄せていたという事実を下敷きに、両者の思想の中の近似とみられる箇所をつまびらかにして批判的検討を行っている。結論から言えば、テイヤールはハクスレーとは異なり、もっぱら絶対者を前提しているため、そのヴィジョンは極めて終末論的である。無論この相違はハクスレー自身も明確に感知し、且つ距離をおいていた点でもある。

教育学者・周郷博はテイヤールに深く傾倒していた人物であり、「テイヤール・ド・シャルダン覚えがき」⁽⁵⁴⁾ではエッセイ調でテイヤールへの思い入れを記している。ここでは周郷が八杉龍一、湯川秀樹らを交えての『現象としての人間』の邦訳を企図しつつもそれには至らず、代わりに『人間讃歌』を執筆した経緯が語られる。周郷は、テイヤールの総合的な視野が現代の人間観を救い、かつ自身の専門領域である「教育」にとっても光明となるものであると考えている。「テイヤール——人」とその「人間」観——私のためのノート——」⁽⁵⁵⁾では、科学と人間の人格的な接続という観点から、テイヤールの「現象としての」人間観を紐解かんとする。ここで周郷はテイヤールをトマス・アクィナスやガリレオ・ガリレイ、アルベルト・アインシュタインといった歴々と比し、またサン＝テグジュペリやシモーヌ・ヴェイユの思想と比較した論文に言及することによって、テイヤールの思想が思想史に組み込みうる頑強さ・意義深さを持っていることを示唆している⁽⁵⁶⁾。

また、日本では 1971 年に日本テイヤール協会⁽⁵⁷⁾が発足し、2015 年まで機関紙『コンベルジャン

ス (CONVERGENCE)』を発行していた。ここには研究論文からエッセイ調の文書まで掲載されており、テイヤールの著作の翻訳の連載のほか、関連する海外の研究論文や会報、シンポジウムの様子などが紹介されている。掲載文書の傾向として、テイヤールを神学的に高く評価しながらその先見性・今日性を広報するものが多く、翻訳について多いのがこれまで見てきたような科学と宗教の架橋の姿勢に焦点化した文書である。テイヤール思想を禁忌として扱うという土壌を持っていなかった日本で、輸入されたテイヤール思想が個々人を魅了していた様子を刻明に映している。

『岩波講座 宗教と科学 2 歴史のなかの宗教と科学』⁽⁵⁸⁾の中でも、仏文学者・田辺保がケーススタディの枠でテイヤールの生涯と思想を紹介している。田辺自身のパリ留学時の追想では、第二ヴァチカン公会議の開催にともなう熱気の中でテイヤールの思想もまた活発な議論の中心になっていたことが語られる。田辺による言及は幅広く、頻繁に議論的になる「接線エネルギー」、「動径エネルギー」といった語からテイヤールの戦場での幻視体験にまで及んでいる。楽観主義や汎神論という評を退けながらテイヤールに寄り添った解説を行っているが、特徴的なのは「善意のカトリック教徒たちが、テイヤールの思想を正統性に近づけたいあまりに、その教会観や伝統への忠実さからしてヴァチカン第二公会議以前の古い教理と適合するものとみなそうと努力することは無益であろうと思う（たとえば、リュバック師など）。教会もまた、内側から開いて行くべきだろう」⁽⁵⁹⁾と、テイヤールの思想をもはや伝統的キリスト教の枠組みに押し込めない形での解釈を推進せんとしている点である。田辺は続けて、SF小説の傾向や、脳生理学、宇宙物理学の照準にテイヤール的な「惑星的思考」、「ユマニテへのきざし」が見られるのではないかと語る。

以上、テイヤール思想を主題とした日本の諸論文を紹介してきた。いずれもテイヤールを肯定的に評価しており、1章で見たような強固な神学的批判は、少なくとも論文という形では国内には見られないようである。主に彼の学際性・総合志向を称えながら幾らかの不備には譲歩するという論調は、ここでも繰り返されている。

しかし、『現象としての人間』に収録された月報の、仏文学者・朝比奈誼による、少なくとも賛美ではない立場で書かれた小論「戦慄すべき思想」⁽⁶⁰⁾はその限りではない。

テイヤールが、これまで人間を培ってきた宇宙が人間を滅びへと導いてゆくはずがないという、願望とも表裏一体であるような確信をもって構築した理論を「カント以前ともいえそうな素朴な目的論的世界観、ないしは体質的とも言ってよい秩序愛＝人生肯定」⁽⁶¹⁾と皮肉を込めて総括する朝比奈は、テイヤールの巨視的な見方は現実世界に反映させようとすると「ファシズムのごとき全体主義」⁽⁶²⁾を肯定するものになると指摘する。その意味において、テイヤールは朝比奈によって「危険な思想家」⁽⁶³⁾と評される。結論の先取りという根本的な問題を抉りながらテイヤール思想の胚胎する危うさに切り込んだ稀有な論である。

救済論・終末論と地続きのものとして解釈したとき、テイヤールの進化論は社会的紐帯の雛形たる教会の賛美、あるいはスピリチュアル思想のどちらかに大別され、双方とも突き詰めれば包括主義的・全体主義的な様相を呈してくるのであるが、評論家・立花隆はあくまで地に足のついた共同体論に解釈の舵をきろうとする。彼は東京大学にて行った講義で、テイヤールの思想を、ハクスリーの思想とロシア宇宙主義に挟む形で11週にわたって解説している⁽⁶⁴⁾。

立花に特徴的なのは、「科学的研究論文として読んでもらわなければならない」という緒言を受けて、テイヤールを「安易に信仰上の議論と進化論をむすびつけるようなことをする人ではありませ

ん」⁽⁶⁵⁾と評し、キリスト教的背景を可能な限り捨象した解釈を試みている点である。立花は、オメガ点という語を用いて展開されるテイヤールのヴィジョンを、全体主義や精神世界ではなく社会共同体についての話と解釈する。

メディアの発達によって人間の共感力やコミュニケーション能力が高まることで人々が精神的に強く結びつき、よりよい社会が生まれる、というのが立花の解釈するテイヤール思想の大まかな流れなのであるが、立花が特に力点を置くのは、テイヤールが「人類共通の脳髓を練り上げる」⁽⁶⁶⁾ものとしてのコンピューターに言及している点である。神経組織網に似たネットワーク上に保存される集団的記憶、そして人間をエレメントとする高次の意識を持った構造体の出来こそがテイヤールの語る進化のイメージであると立花は語る。そして、人間が人間に手を加え、意識的に超進化した先に現れるテイヤールの超人はニーチェの観念的な超人よりも一層リアルで身に迫るものであると言う。立花はテイヤールがオルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』を読んでいた可能性を指摘し、テイヤールがバイオ技術による人間の進歩のイメージも持っていたらと推察する⁽⁶⁷⁾。

立花が強調するのは、科学技術に人間の進化の活路を見ていたテイヤールの予言的とも言える先見性である。そしてまた、科学と人間の発展に関する議論が神の問題と結びついてゆくのは必定でもある⁽⁶⁸⁾。

中盤まではテイヤールの宗教的言明からは距離をとる立花も、結論部では、死を取り巻く悲観と諦観に抗するためには神というものを考えるほかないというテイヤールの主張に言及し、その終末論をパウロのそれと並置して、信仰者としてのテイヤールの姿を捉えた解説を行っている。テイヤールは、個人の死、そして宇宙の死は、外面的には死に見えるものの、至高の存在への合一であると考えていた。ここにおいて進化のイメージは明らかに〈よりよい社会〉という月並みなイメージを超えた何ものかに進展しており、「科学的研究論文として読んでもらわなければならない」というテイヤールの緒言をそのまま受け取ることへの再検討の必要性が改めて浮かび上がってくる。

本稿では、ここまで、主にテイヤールの「宗教と科学」の統合の試みに焦点化した論を概観してきた。全体としては、テイヤール思想の要旨・独自性を示しつつ、その先進的な姿勢を称揚する論と、その科学的前提が内包する不備・難点に厳しい目を向ける論をゆきつ戻りつしていたように思える。肯定的な評価と否定的な評価が相殺しあうような状況が取り巻いているとも言え、また、そのためにテイヤール思想の研究がそれ以上の発展の見込めないものであるかのような印象も抱きかねない。

それでは、テイヤールの思想は宗教と科学をめぐる論争の中の一要素に過ぎず、評価が定まったもの、出尽くしたものであって、これ以上あえて取り上げる意義を持たないのであろうか。

次章では、その問いに答えるために、「宗教と科学」というテイヤールの命題と双翼をなしうる思想に着目する。もはや科学の言葉をも棄却した進化のヴィジョンが、テイヤールの一篇の詩に表れている。これは謂わばテイヤールの神秘的イメージの在処を示すものであり、テイヤールの進化思想が「宗教と科学」の枠組みのみに回収しえないことを端的に表すものである。

4章 「永遠に女性的なるもの」に関する研究

本章で扱うのは、テイヤールが第一次世界大戦従軍中に完成させた詩篇「永遠に女性的なるもの——ベアトリックスに——」（以下、「詩篇・永遠に女性的なるもの」）⁽⁶⁹⁾および、それについての先

行研究である。この詩篇の中では、「永遠に女性的なるもの」（クライマックスにおいてその正体が処女マリアであると明かされる）が、抗しがたい魅力によって人間を惹きつけながら神の方へと導いてゆくというヴィジョンが語られる。テイヤールは、あらゆるものを引き寄せ結び付ける聖なる力（親和力）を女性の中に見る⁽⁷⁰⁾。進化の流れの中で人間の絶えざる努力によって到達しようと思われたオメガ点は、媒介者たる「永遠に女性的なるもの」の牽引あってこそ至れる極点であることがここで示されているのである。

テイヤールの進化思想に関する膨大な量の研究論文と比べると、この詩篇についての先行研究はあまりにも少ない。しかし、それを理由にこの詩についての研究が不要あるいは不毛であると断ずるとすれば、それは早計である。

イエズス会士ボスコ・ルーは『ヌーヴェル・ルヴュ・テオロジーク (*Nouvelle Revue Théologique*)』の掲載論文において、テイヤールと七人の女性、特に芸術家・ルシール・スワンとの関係を軸に、「詩篇・永遠に女性的なるもの」に表れたテイヤールの女性観を詳らかにしている。人間を神に向かって引き寄せながら最後は神の中に蕩尽する献身的な女性像は、テイヤールにあって現実の女性にも投影されていたようである⁽⁷¹⁾。

「詩篇・永遠に女性的なるもの」は、ダンテの『神曲』、およびゲーテの『ファウスト』第二部クライマックスの神秘の合唱⁽⁷²⁾に材を取っているのであるが、明確に両者との照合を試みた研究は少ない。ゆえにエドワード・ファルージャによる「詩篇・永遠に女性的なるもの」の文学的分析は貴重である⁽⁷³⁾。ファルージャはロシアの哲学者ウラジミール・ソロヴィヨフおよびニコライ・ベルジャエフの思想に言及し、東方のソフィア神学をも視程に収めながら、「グノーシス」をキーワードにゲーテとテイヤールの作品を比較する。そしてテイヤールが、ゲーテとは異なり、一種のグノーシスの陥穽をも踏み越えて永遠の女性を教会と聖母として描き切っている点を「フェミニズム後のフェミニズム」と形容し高く評している。

以上のように、「詩篇・永遠に女性的なるもの」に関する比較的新しい論文は散見されるのであるが、しかし何をおいても特筆すべきは、リュバックがテイヤールの死後13年ののちにこの詩篇の解題ともいえる著作『永遠に女性的なるもの ティヤール・ド・シャルダンの一詩篇の研究』を著していることである。リュバックは、テイヤールの「人間のエネルギー (*L'énergie humaine*)」⁽⁷⁴⁾に見られる以下のような結婚観・性愛観に充分依拠しながら、この詩を読み解いてゆく。

テイヤールは司祭として貞潔を守り、貞潔の美德を称えながらも、過度な禁欲生活が時代遅れであると考える。女性性を神秘化し、その聖なる力の男性への貢献を重要視するテイヤールは、自身は無論妻帯しないまでも、異なる性の協働としての夫婦の紐帯を称揚する。このように「人が独りでいるのはよくない」（創2・18）というキリスト教的結婚観に即したテイヤールの思想は、しかし「産めよ、増えよ」（創1・28）の手前で立ち止まる。テイヤールの見解によれば、人口が飽和しつつあるこの時代に、なおも愛の力が収束する兆しを見せないということは、人間に与えられた目的は単なる人口増加ではない。テイヤールは子どもが夫婦の結びつきにとって有用であることは認めつつも、子の産出自体は結婚の目的としては二義的であるとする。では最も重要なものは何かというと、それはひとえに神である。夫婦はもはや子によってではなく神への愛によって結びつき、そして互いに対して盲目にならず、やがては愛の肉体的側面からも離脱して世界へとひらかれてゆかねばならないとテイヤールは考える。テイヤールはこのような形で、彼なりの仕方、進化＝オメガ

ガ点への道行きというものを、結婚という現実に即した事象と絡めて語る⁽⁷⁵⁾。このことについてリュバックは「彼が明日、ないしはそれより未来の人類に提起している理想は、『肉体的行為』の増加を可能ならしめる『産児制限』ではなく、それとは正反対に、精神的進歩を利するための肉体的行為の漸減なのである」と解説を加える⁽⁷⁶⁾。

またリュバックは、テイヤールのマリア論にも言及する。彼は、テイヤールの書簡から聖母被昇天の教義化⁽⁷⁷⁾に関する「わたしは（ヤーウェの『男性』と均衡を保つための）『マリア的なもの』の生物心理学的な必然性を十分意識していますから、この態度表明の深い必要を痛感しています」⁽⁷⁸⁾、「人類のめざす礼拝は、女性的なものもそこに役割を有しないかぎり、完全なものにはならない」⁽⁷⁹⁾という言葉を引いて、テイヤールが「神性の『怖ろしいばかり男性化された』観念」⁽⁸⁰⁾を中和させるような母性的な神のイメージを持っていたことを指摘する。そのうえでリュバックは、テイヤールがマリアを神に対するその純粋さと従順ゆえに人間の範型と考えていたのであり、決して女神のようなものとして扱っていたのではない、と念押しする⁽⁸¹⁾。

このようにリュバックは、テイヤールの正統的なマリア崇敬の姿勢を記すことによって、この著作に可能な限りテイヤール擁護の書としての役割を担わせているのであるが、訳者である山崎庸一郎⁽⁸²⁾は異なる視点からの解釈を添える。

人間はこれまで子の産出による種の存続という形で相対的な不死を実現していたが、人間がオメガ点に至りうる存在である以上、ゆくゆくは肉体から離脱して神と一致することで絶対的不死を獲得することに意識を向けることになる、というのがテイヤールの見据える未来だと山崎は述べる⁽⁸³⁾。

山崎は続けて、テイヤールのこのヴィジョンが、禁欲か放埒かという二極ではない、それらを昇華した第三の道を提示するものであるとして、「全般的脱聖化の時代の中で、聖と性の両義性の関係に鋭い問いなおしを求めるもの」⁽⁸⁴⁾と評価する。これは、信仰か科学かという二者択一ではなく、それらの昇華を追求したテイヤールの志向と必然的に重なり合うものでもあろう。そして山崎は、テイヤールが母胎回帰的な「退行」の誘惑に屈せずに神への絶えざる前進を試みたと述べながらも、その「性」の捉え方がプラトンの『饗宴』で語られるような過去のユートピア、両性具有の楽園を志向するものであると見て取る。そして以下のようにまとめる。

テイヤールは敬虔なカトリック教徒として、幼時より、「天使祝詞」や「聖マリアへの連禱」などを通じて、伝統的な聖母礼拝に忠実であった。しかし彼の詩篇の独自性は、その忠実さを宇宙的キリストの規模にまで拡大したという点にあるだろう。だが、彼の女性的なるものについての観念はそれだけにとどまるものではない。テイヤールはまた、プラトンとともに、人類のもっとも古くからの夢、世界の原初と終局にあるべき両性の本源的一体性への、エロスの昇華への、それを通じての神的なものとの結合への、聖なる夢を甦らせる。⁽⁸⁵⁾

このように見てゆくと、「詩篇・永遠に女性的なるもの」および、この詩を読み解くためにリュバックらが参照したテイヤールの結婚観といった、女性的なものへの視座を含むテイヤールの思想の探求は、先に見たような「宗教と科学」の枠組みでの研究とは甚だしく毛色の異なるものとなるのが分かる。換言すれば、ここにおいてテイヤールの思想は神学および科学的な妥当性とは異なる位相で掘り下げられるのである。

ティヤールの思想を貫いているのは、「神(=聖なるもの)と世界(=俗なるもの)は対立しない」という彼の直観である。この直観は、「宗教と科学」という分野においては独自の進化論という形で結実し、より現実に即した次元では、結婚や性愛という事象に及んでいる。現実に即しているといえども、否、それゆえにこそティヤールの結婚観は終末論的・救済論的である。結婚は種の再生産を目的とするものではなく、精神的愛による紐帯を実現するためのもの、そしてその果てに神との一致という絶対的不死に与るためのものであり、愛が限りなく精神化された地上においてはもはや新たな命が誕生することはなく、人間は死を超えて完全なものとなるというティヤールのヴィジョンは、彼の代名詞たる進化思想と同等、もしくはそれ以上に特異なものであるかもしれない。

おわりに

本稿では、諸領域におけるティヤール思想への評価を概観した。肯定的な研究者はティヤールの宗教と科学の架橋の試みを高く評価し、神学的あるいは科学的誤謬には目を瞑る。批判者はその誤謬を鋭く突く。多少暴力的に抽象化するとティヤール受容の傾向はこの二極に分かれるのであるが、細部に注目すると、全体主義に陥りかねない巨視性を糾弾する見方や、コンピューター時代の到来を幻視していたかのようなその先見性を驚嘆する見方も見出された。また、聖なるものと世俗的なものを昇華した第三の道(これは中間点とは峻別される)の模索がティヤールの根本命題であるということ考えたとき、「詩篇・永遠に女性的なるもの」に着目した研究が、ティヤールの進化のヴィジョンを「宗教と科学」論の枠組から解放する可能性を持つものとして浮かび上がってきた。「子午線が極に近づくに従って集まるように」⁽⁸⁶⁾万象が一点に収斂すると確信していたティヤールを、「聖と俗」の統合の試みという思想の全体像を見ず「宗教と科学」の枠の中でのみ捉えている限り、「ティヤールの思想は神学的にも科学的にも誤謬を孕むが、両者の架橋を試みたその姿勢は評価すべきものである」という凝固した結論に至るしかないのであれば、異なるアプローチ、すなわちこの詩篇を主軸にした研究こそが、ティヤール思想への新たな登攀を可能にするものとして推進されるべきであろう。

註

- (1) Pierre Teilhard de Chardin, *Oeuvres de Pierre Teilhard de Chardin, tome I, Le Phénomène humain*, Paris, Seuil, 1955. (美田稔訳『ティヤール・ド・シャルダン著作集 1 現象としての人間』みすず書房, 1969年。)
- (2) 主たる発足地はフランス, イギリス, アメリカ, ベルギーである。日本では1971年に日本ティヤール協会が発足され, 2015年まで機関誌『CONVERGENCE』を発行していた。1981年に「日本ティヤール研究会」に改名し, 2008年までは「ティヤール」「テイヤール」と表記が揺れていたが, 以降「日本ティヤール研究会」に統一されている。問い合わせたところ, 現在は活動を休止しているとの回答が得られた。
- (3) 小西広志「回勅『ラウダート・シ』に見られるティヤール・ド・シャルダンの影響」(『日本カトリック神学会誌』28号, 2017年, 175-191頁)に詳しい。以下列挙すると, イエズス会総長ペトロ・アルベ(1965年, 総長就任の記者会見にて), パウロ6世(1966年の発言), ヨハ

- ネ・パウロ 2 世 (1981 年, テイヤール生誕 100 周年のメッセージ), ベネディクト 16 世 (教皇就任前, 1967 年の神学講座にて。また 2009 年と 2012 年の挨拶と祈りにて)。
- (4) 教皇フランシスコ『回勅ラウダート・シとともに暮らす家を大切に』(瀬本正之, 吉川まみ訳, カトリック中央協議会, 2016 年)を参照。「宇宙は, 究極的に神の充満に達するように定められており, その充満は, すべてのものが成熟の尺度である復活されたキリストによってすでに達成されています」(75 頁)という言葉に, 「この領域については, テイヤール・ド・シャルダン神父の貢献を挙げることができる」(219 頁)という註がつけられている。
 - (5) CNN, “Bishop Michael Curry's wedding address -- the full text”, May 19, 2018. <http://edition.cnn.com/2018/05/19/europe/michael-curry-royal-wedding-sermon-full-text-intl/index.html> (accessed October 3, 2018)
 - (6) テイヤールの思想について日本語で簡潔にまとめたものとしては, ペトロ・ネメシェギの「シャルダンの神学」(『理想』434 号, 1969 年, 理想社, 25-36 頁) および「テイヤール=ド=シャルダンに見られる自然科学と宗教の接点」(上智大学神学会『カトリック研究』41 号, 1982 年, 59-81 頁), W・A・グロータースの「テイヤール・ド・シャルダン追悼」(上智大學編『ソフィア』1955 年秋号, 55-59 頁) が挙げられる。ただし, いずれも神学的な立場からの記述であることは注記しておきたい。
 - (7) 周郷博『人間讃歌』講談社, 1965 年, 171 頁。
 - (8) 岸英司「ヴィジョンの人テイヤール・ド・シャルダン」, 『CONVERGENCE』19 号, 1990 年, 31 頁。
 - (9) Wolfgang Smith, *Theistic Evolution: The Teilhardian Heresy*, New York, Angelico Press, 2012.
 - (10) Dietrich von Hildebrand, *Das Trojanische Pferd in der Stadt Gottes*, Regensburg, Verlag Josef Habbel, 1968.
 - (11) テイヤール『現象としての人間』15 頁。この一文について, 海洋生物学者アリスター・ハーディは「私は残念ながらそうではないと思う」とコメントしている。アリスター・ハーディ(長野敬, 中村美子訳)『神の生物学』紀伊国屋書店, 1979 年, 87 頁。また, ベルギー出身のイエズス会士・北原隆は, この文章を, 教義にかかわる著作を禁じられていたテイヤールが出版許可を得るために付記したものと推察する。実際, これは原稿完成の 7 年後に付け加えられた文章である。結局のところ当時は許可を得られず, 死後にこの一文が様々な形で取り沙汰され, 今に至っているというのが北原の見立てである。北原隆「書評・シャルダンのビジョンは科学なのか」, 『CONVERGENCE』13 号, 1988 年, 51-58 頁。
 - (12) テイヤールの死後十年以内の研究動向調査をハインリヒ・ミュラーとアンニバレ・ファントリが行っている。ハインリヒ・ミュラー「海外評論誌展望 宇宙における人間 テイヤールの進化論」, 『ソフィア 西洋文化ならびに東西文化交流の研究』9 号, 1960 年。アンニバレ・ファントリ(別宮貞徳訳)「テイヤール・ド・シャルダンの方法論をめぐる最近の論争」, 『ソフィア』13 号, 1964 年。この時点で, テイヤールの学際志向を評価し, 学問的正確さについては譲歩するという評価の傾向が定まりつつある様子が見受けられる。
 - (13) テイヤールをプロセス神学と併せて言及している例としては, Ewert H. and Cousins (eds.),

- Process theology: basic writing*, (New York, Newman Press, 1971) が挙げられる。その際ホワイトヘッドの思想との関連が示されている。
- (14) Henri de Lubac, *La pensée religieuse du père Pierre Teilhard de Chardin*, Paris, Aubier, 1962. 美田稔による邦訳「ピエール・テイヤール・ド・シャルダンの宗教思想」が『CONVERGENCE』13~18, 20, 21号に掲載されている。
- (15) Henri de Lubac, *L'Éternel féminin: étude sur un texte du Père Teilhard de Chardin: suivi de Teilhard et notre temps*, Paris, Aubier-Montaigne, 1968, pp. 217-336. (アンリ・ド・リュバック「テイヤールと現代」, 『永遠に女性的なるもの テイヤール・ド・シャルダンの一詩篇の研究』山崎庸一郎訳, 法政大学出版局, 1980年, 165-257頁。)
- (16) テイヤール・ド・シャルダン (山口敏訳) 『テイヤール・ド・シャルダン著作集 6 過去のヴィジョン』みすず書房, 1971年, 158頁。
- (17) リュバックはテイヤールを「神秘主義的思想家 un penseur mystique」である以上に「神秘家 un mystique」であると評している。リュバックは、後者が祈りの形態や程度ではなく、魂の態度に特徴づけられるものであるとする。Henri de Lubac, *La pensée religieuse du père Pierre Teilhard de Chardin*, pp.119-120. (アンリ・ド・リュバック (美田稔訳)「ピエール・テイヤール・ド・シャルダンの宗教思想(6)」, 『CONVERGENCE』18号, 1993年, 27-29頁。)
- (18) 後述の宗教学者 Ursula King および物理学博士 Kathleen Duffy がテイヤールと神秘主義という主題で単著を出している。以下を参照。Ursula King, *Teilhard de Chardin and Eastern Religions: Spirituality and Mysticism in an Evolutionary World*, Mahwah, Paulist Press, 2011. Kathleen Duffy, *Teilhard's Mysticism: Seeing the Inner Face of Evolution*, New York, Orbis Books, 2014. また, *Modern Spiritual Masters Series* (New York, Orbis Books)では, リジューのテレズやイヴリン・アンダーヒルらと並べてテイヤールのアンソロジーが組まれている。
- (19) 反対に「神秘主義」はピーター・メダワーら一部の科学者によって, 曖昧さや論理的飛躍を孕んだ記述の代名詞として, すなわち蔑称として用いられる。「詩人」という肩書についても同じことが言える。詩人という表現は, 科学論文と言うにはあまりに叙事詩的な記述をするテイヤールを肯定的に評する際にも否定的に評する際にも用いられる。
- (20) Pierre Teilhard de Chardin (tr. by Bernard Wall), *Letters to Léontine Zanta*, New York, Harper & Row, 1969.
- (21) 以下の言葉に, この態度が如実に表れている。「世界の《広さ, 長さ, 高さ》に属するものは何一つキリストの手からのがれることはできないのであるから, キリスト教徒のなすべきことは, 仏教徒のように諸事物を回避することによってそれらから脱出することではない。諸事物を徹底的に探究し, 測定し, 征服することによってそれらを凌駕しなければならないのである。」テイヤール・ド・シャルダン (渡辺義愛訳) 『テイヤール・ド・シャルダン著作集 9 科学とキリスト』みすず書房, 1971年, 152頁。
- (22) 開催地一覧: 2001 リールとヘースティングス, 2002 パリとカイロ, 2003 北京とストラスブール, 2004 ローマとパリ, 2005 ニューヨークとパリ。美田稔「北京でのテイヤール国際シンポジウム」(『CONVERGENCE』27号, 2003年, 21-24頁) および, 美田稔「ニューヨー

- ク・ワシントンでのテイヤール国際シンポジウム」(『CONVERGENCE』29号, 2005年, 5-10頁)を参照。
- (23) 『金大中獄中書簡』(和田春樹, 金学鉉, 高崎宗史訳, 岩波書店, 1983年)に思想的よりどころとしてテイヤールの名が頻出するなど, その影響はヨーロッパに留まらない。
- (24) Hildebrand, op.cit., S.217-220.
- (25) Paul A. Wickens, *Christ Denied*, Rockford, TAN, 1982.
- (26) 人間を現象として捉えるがゆえに巨視的になり, 苦しみという差し迫った問題さえも進化への材料と見做したテイヤールがエミール・シオランを激怒せしめた際, シオランが批判の文言として用いたのも「楽観主義」という言葉である。エミール・シオラン(金井裕訳)『シオラン対談集』法政大学出版局, 1998, 21頁。ただしこれはスペインの哲学者フェルナンド・サヴァテールとの対談時のシオランによる追想であり, テイヤールとシオランの具体的な会話の記録は残っていない。
- (27) テイヤール『現象としての人間』, 383頁。
- (28) 第一回の記録は以下に収められている。René Maheu, *Science et synthèse*, Paris, Gallimard, 1967。(ユネスコ編『科学と総合 アインシュタインとテイヤールをめぐって 物理・生命科学から人間科学へ』林一訳, 白揚社, 1979年。)
- (29) アドルフ・ポルトマン「言葉と創造」(エラノス会議編『エラノス叢書9 言葉と創造』村上陽一郎ほか訳, 平凡社, 1996年, 239頁)を参照。ポルトマンは生物学者のみでなく, ゲーテ研究者としての一面も持つ。エラノス会議に参加するなど, 活動の幅は広い。
- (30) P. B. Medawar, *The Strange Case of the Spotted Mice: And Other Classic Essays on Science*, New York, Oxford University Press, 1996, pp. 1-11.
- (31) リチャード・ドーキンス(福岡伸一訳)『虹の解体 いかにして科学は驚異への扉を開いたか』早川書房, 2001年, 246頁。
- (32) このような客観性の問題を前提としながらテイヤールの方法論を吟味した論文として, 八杉龍一「テイヤールと進化」(『理想』434号, 1969年, 18-24頁)が挙げられる。
- (33) テイヤール『現象としての人間』, 16頁。
- (34) 同書, 20頁。
- (35) Ursula King, *Christ in All Things: Exploring Spirituality with Teilhard de Chardin*, New York, Orbis Books, 2016, pp. 115-140.
- (36) マイスター・エックハルト, ヨハネス・タウラー, ウィリアム・ジェームズなどが挙げられている。同書, 119頁を参照。
- (37) ジョセフ・マレシャル, アンリ・ブレモンなどが挙げられている。同書, 118-120頁を参照。
- (38) 興味深い例として, イタリアの無神論者の建築家パオロ・ソレリがテイヤールの思想に影響を受け, アリゾナ州の砂漠地帯に実験都市アーコサンティを建設したことが挙げられる。市内には Teilhard de Chardin cloister という展示資料館がある。Paolo Soleri, *The Bridge Between Matter & Spirit is Matter Becoming Spirit: the Arcology of Paolo Soleri*, New York, Anchor Books, 1973。(パオロ・ソレリ『生態建築論 物質と精神の架け橋』工藤国雄訳, 彰国社, 1977年。)

- (39) Mircea Eliade, *Occultism, Witchcraft, and Cultural Fashions: Essays in Comparative Religion*, Chicago, University of Chicago Press, 1976, pp. 11-13. (ミルチャ・エリアーデ『オカルティズム・魔術・文化流行』楠正弘, 池上良正訳, 未来社, 1978年, 27-31頁。) エリアーデ自身は「おそらく『プラネート』の読者とテイヤール・ド・シャルダンのそれとは同一ではないだろう」(28頁)とあくまで深入りを避けているが, Louis Pauwels, et Jacques Bergier, *Le Matin des magiciens*, Paris, Gallimard, 1961. (ルイ・ポーウェル, ジャック・ベルジェ『神秘学大全 魔術師が未来の扉を開く』伊東守男編訳, サイマル出版会, 1975年)や, David H. Lane, *The phenomenon of Teilhard: prophet for a new age*, Macon, Mercer University Press, 1996のように, ティヤールとオカルト思想やニューエイジを併置して検討する類の研究もある。また, エリアーデ曰く『プラネート』は *Le Matin des magiciens* の売り上げを元にとポーウェルとベルジェが発刊したものであり, そこにはテイヤールについての記事も掲載されていた。
- (40) エリアーデ前掲書, 26頁。
- (41) 同書, 27頁。
- (42) 同書, 29頁。
- (43) 同書, 35-37頁。
- (44) 書誌情報は註6に記載。また, グロータースによると, この論文の存在を知ったローマ教皇庁が滞日イエズス会士の「ミラー」という人物にテイヤール批判の論文を書くよう指示したという。「対談「物質と精神」—自然科学と宗教の一致」, 『CONVERGENCE』19号, 1994年, 15-16頁。なお, 対談の中でグロータースは「ミラー」による論文が「次の号」に掲載されたと発言しているが, 該当するものは5年後に掲載されたハインリヒ・ミュラー「海外評論誌展望」(『ソフィア』1960年夏号, 81-95頁, 本間英世訳)であると思われる。本論文でミュラーは, ティヤールの思想を批判した諸論文を紹介しながら, 科学と宗教の架橋の姿勢を評価している。
- (45) 『思想』494号, 1965年, 岩波書店。
- (46) 『理想』434号, 1969年, 理想社。
- (47) 三雲夏生「現代とテイヤール・ド・シャルダン」, 『理想』434号, 1-8頁。
- (48) 江藤太郎「テイヤール・ド・シャルダンの哲学思想について」, 同誌, 9-17頁。
- (49) 八杉龍一「人間の偉大さと「見ること」——私のテイヤール・ノート——」, 『思想』494号, 110頁を参照。
- (50) 書誌情報は註32に記載。
- (51) 八杉「人間の偉大さと「見ること」——私のテイヤール・ノート——」, 『思想』494号, 110-118頁。
- (52) 書誌情報は註6に記載。
- (53) 島崎通夫「J・S・ハックスレーとテイヤール・ド・シャルダン」, 同誌, 37-44頁。
- (54) 周郷博「テイヤール・ド・シャルダン覚えがき」, 同誌, 45-53頁。
- (55) 周郷博「テイヤール—「人」とその「人間」観——私のためのノート——」, 『思想』494号, 99-109頁。

- (56) ヴェイユとの親近性は諸論文で指摘されるが、それを批判的に検討したものとして『ティヤール・ド・シャルダン著作集 8 ある思想の誕生』（山崎庸一郎訳、みすず書房、1969年）の月報に収録されている、仏文学者・大木健による小論「症状と解毒剤」がある。
- (57) 来歴については註2を参照されたい。
- (58) 河合隼雄ほか編、岩波書店、1993年、273-300頁。
- (59) 同書、298頁。
- (60) 朝比奈誼「月報2 戦慄すべき思想」、『ティヤール・ド・シャルダン著作集1 現象としての人間』。
- (61) 同月報、3頁。
- (62) 同月報、4頁。
- (63) 同上。
- (64) 1996年に開講。この講義録が、月刊誌『新潮』（1997年、第94巻5号～2002年、第99巻9号）に掲載されている。
- (65) 立花隆「人間の現在 第20回」、『新潮』96巻3号、1999年、291-292頁。
- (66) 立花「人間の現在 第23回」、『新潮』96巻6号、1999年、322頁。
- (67) 立花「人間の現在 第24回」、『新潮』96巻7号、1999年、284頁。また、奥村大介による「すばらしい新世界」に関する以下の評論において、ドラッグによる一体感についての文脈でティヤールの思想に触れられている。「この個の融合のテーマは、SF的作品に散見される。〔中略〕またカトリックの思想家ティヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chardin, 1881-1955) の宇宙進化論の最終段階における人類の姿とも重なる。また進化の極限とは逆に、生命の始原、すなわち〈黄金時代〉における融合——あるいは自他未分——のテーマはプラトン『饗宴』やバタイユ『エロティシズム』 (Georges Bataille, *L'erotisme*, 1957. 澁澤龍彦訳、二見書房、1973年) にもみられる。」奥村大介「生命の(反)ユートピア——オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』を読む——」、東京大学教育学部教育史・教育哲学研究室『研究室紀要』41号、2015年、123頁。また、いくつかのSF・ディストピア小説の中にはティヤールの名が散見される。ダン・シモンズの『ハイペリオン』シリーズには聖ティヤールという名が見られ、ミシェル・ウエルベックの『ある島の可能性』にはティヤールの著作『神のくに (*Le Milieu divin*)』への言及がある。日本ではSF作家小松左京が、ティヤールを、人類を新たに描き出す視野を持ちつつも時代的制約とカトリックという背景ゆえに古風な思想に落ち着いてしまった人物と評し、「彼を、もう十四、五年、生かしておきたかった」と語っている。小松左京「“日本のSF”をめぐって——ミスターXへの公開状」、巽孝之編『日本SF論争史』勁草書房、2000年、68頁。
- (68) 科学と人智が先例のない結びつき方をすることによって人間の歴史に新たな局面が訪れるという発想は、近年流行のシンギュラリティ仮説とも親近性がある。この説への批判のひとつに、高度な汎用AIが実現する統合知によって人間が統括的に管理されるという物語は一神教的支配の構造と相似形であるという主張がある。千葉雅也は、カンタン・メイヤスーの「亡霊のジレンマ」における神の未在論に言及しながら、それがティヤールの進化論と似通った一神教的な救済論であると主張した。千葉雅也「AIが『人間より正しい判断ができる』という

- 思想、やめませんか?」, 現代ビジネス, 2018年7月18日, <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/56578>, 参照日: 2018年9月20日。
- (69) 1918年に執筆された。Pierre Teilhard de Chardin, « L'Éternel féminin a Béatrix », *Écrits du temps de la guerre: 1916-1919*, Paris, Seuil, 1965, pp. 279-291. 山崎による邦訳が, アンリ・ド・リュバック『永遠に女性的なるもの テイヤール・ド・シャルダンの一詩篇の研究』, 321-335頁に掲載されている。
- (70) 神と人間の間にある断絶に橋渡しする女性性のイメージはテイヤールの独創ではなく、『箴言』8章における女性的な知恵表象の流れを汲んでいると考えるべきである。
- (71) Bosco Lu, « L'Amour comme Énergie chez Teilhard de Chardin L'ÉTERNEL FÉMININ », *Nouvelle Revue Théologique*, vol.126(2), 2004, pp. 177-203.
- (72) 「すべて移ろい行くものは、／永遠なるものの比喩にすぎず。／かつて満たされざりしもの、／今ここに満たさる。／名状すべからざるもの、／ここに遂げられたり。／永遠にして女性的なるもの、／われらを牽きて昇らしむ」ゲーテ (高橋義孝訳)『ファウスト 第2部』新潮社, 2010年, 555頁。
- (73) Edward Farrugia, ““L'éternel féminin” in Teilhard de Chardin Intoning the Creation Octave, with Promises to Keep!” in *MELITA THEOLOGICA Journal*, vol.6. (2), 2013, pp. 19-37. 同様に比較文学的手法を用いたものとしては以下の小論も挙げられるが, こちらはゲーテ研究の年報に掲載されているものであり, テイヤールの思想の概略と詩篇の紹介という性格が強い。Donald C. Riechel, ““Esprit faustien” — “Esprit chretien”: Goethe's Faust and Teilhard de Chardin's Le Phénomène humain,” in *Goethe Yearbook*, vol.9, 1999, pp. 318-342.
- (74) Pierre Teilhard de Chardin, *Oeuvres de Pierre Teilhard de Chardin, tome VI, L'énergie humaine*, Paris, Seuil, 1962. (日高敏隆, 高橋三義訳「人間のエネルギー」, 『テイヤール・ド・シャルダン著作集2 自然における人間の位置 人間のエネルギー』みすず書房, 1972年。)
- (75) これについてリュバックは「未来の地平に, 肉的情愛からも不毛な感傷性からも同じように遠い貞潔なる愛を措定し, それを通じて, 人間はすべての同胞と世界全体とに対しておのれをひらき, その状態こそが, 原初の完全性の回復, 歴史の終焉, 死に対する勝利であるとした」と語る。リュバック『永遠に女性的なるもの テイヤール・ド・シャルダンの一詩篇の研究』46頁。ここで, ソロヴィヨフおよびベルジャーエフの女性観・性愛観との思想的近似が指摘されている。同書, 236頁を参照。また, フランスのイエズス会士エミール・リドーもこの点に関して見解を述べている。リドーは, 肉体の否定をとまなう過度な禁欲ではなく夫婦の愛を尊重したテイヤールに, 世俗の価値の肯定という点で第二ヴァチカン公会議に先んじるものを見て評価しながらも, テイヤールの考えが夫婦というものの中にある現実的な問題に即していないと述べ, 「きれいごとのきらいがある」とし, そしてそれを「すべての神秘主義の欠点」と言い表した。そして, テイヤールが性のエネルギーの御しがたさを理解しておらず, また禁欲生活への反動から童貞性の美点を見落としていると批判する。エミール・リドー (村上寿夫訳)「テイヤール・ド・シャルダンによる『性』」, 『神学ダイジェスト』27号, 1972年, 66-76頁。また, テイヤールが世俗的価値を否定しなかったことと, 子ではなく神への愛によって結びつく夫婦像を提示したことを理由に, テイヤールの愛についての観念を同性愛や同

性愛寛容という「問題」の根源と見做す批判も出た (Wickens, *op.cit.* p.36)。もつとも、テイヤールは肉体を忌避こそしないが最終的にはそこから脱すべきであると語っており、また女性性という概念をそのまま現実の女性に当て嵌める傾向があり、そのうえで夫婦というものを想定しているので、上記の見方については再検討が必要であろう。

- (76) 同書, 67 頁。「ある段階以降は出産の制限政策を予想し、かつ、それがのぞましいと判断したうえで、彼は、その現象が夫婦関係の相互的精神化によって可能になると期待しているということである」という言葉に続く。ここでリュバックが具体的に何を想定していたのかは不明だが、19 世紀後期に出産しない権利を主張してフランスで活動していたフェミニズム系の団体・新マルサス主義との影響関係については研究の余地があろう。
- (77) 1950 年, ピウス 12 世による。
- (78) リュバック前掲書 158 頁に引用された 1950 年 8 月 18 日の Pierre Leroy 宛の手紙。リュバックの直接の参照元ではないが、Pierre Leroy, *Lettres familières de Pierre Teilhard de Chardin, mon ami: les dernières années, 1948-1955* (Paris, Centurion, 1976, p.71)に該当箇所が掲載されている。
- (79) 同書, 296 頁。Maryse Choisy 宛の手紙。
- (80) 同書, 158 頁。
- (81) 同様に、イエズス会神父でありテイヤールについての論文で哲学と神学の学位を取得した G・H・ボードリイは、テイヤールがノートルダム大学の聖マリア会に属していたことやロザリオの祈りを欠かさなかったことを挙げながら彼のマリア崇敬の深さについて述べる。それとともに、あくまでマリアは、イエスの母でありそして教会の象徴であるという点でテイヤールの崇敬の対象であったということ、すなわちそれが逸脱した「マリア崇拜」ではなかったということを強調する。G・H・ボードリイ (後藤平, 三嶋唯義訳) 『信仰と科学 テイヤール・ド・シャルダン』創造社, 1978 年, 184-188 頁。
- (82) 仏文学者。テイヤールのほか、シモーヌ・ヴェイユの研究やサン＝テグジュペリの著作の訳で知られる。
- (83) 山崎庸一郎「解説」、リュバック『永遠に女性的なるもの テイヤール・ド・シャルダンの一詩篇の研究』, 343 頁を参照。
- (84) 山崎, 同, 343-344 頁。
- (85) 山崎, 同, 341 頁。
- (86) テイヤール『現象としての人間』, 16 頁。